

# アルコール摂取がリスクテイキング行動に及ぼす影響

～クイズを用いた室内実験による検証～\*

○芳賀 繁

(立教大学現代心理学部)

キーワード: リスク行動, 飲酒, 室内実験

Effect of alcohol intake on risk-taking behavior: Examination by a laboratory experiment using quizzes

Shigeru HAGA

(Rikkyo University)

Key words: Risk-taking behavior, Drinking, Laboratory experiment

## 目 的

少量のアルコール摂取でも認知・判断課題のパフォーマンスに悪影響を及ぼすことについては藤田(2004), 中村(2006)らの研究によって明らかになっている。しかし, アルコールとリスクテイキングの関係に関する研究は少ない。そこで本研究では, アルコールがリスクテイキング行動に及ぼす影響を, クイズに対する回答傾向によって調べることを試みた。

## 方 法

**実験計画** 呼気中アルコール濃度(飲酒なし条件, 0.15mg/l 条件, 0.30mg/l 条件)を被験者内要因とし, 東大式 ALDH2 表現型スクリーニングテストによって分類された欠損型(酒に弱い群)・非欠損型(酒に強い群)を被験者間要因とする混合計画とした。

**実験参加者** 成人した大学生 16 名(男性 10 名, 女性 6 名, 平均年齢 21.44 歳)であった。このうちの男性 1 名は, 回答時間が他の参加者と比べ異常に早く, 飲酒後の条件での回答に大きな偏りが生じていたため分析対象から外した。

**実験課題** 算数・国語・地理の分野から Yes/No で答えられる問題を各条件で 15 問設定し, 1 問ずつディスプレイ上に提示した。参加者は問題ごとに与えられた制限時間内に問題を解き, 口頭で回答してもらった。参加者の回答は得点化され, Yes と回答して正解だった場合はプラス 10 点, 不正解だった場合はマイナス 10 点となり, No と回答して正解だった場合はプラス 5 点, 不正解だった場合はマイナス 5 点を得た。つまり, No はリスクの低い回答であり, 逆に Yes はリスクの高い回答である。各問題での得点とそれまでの合計得点は, 1 問終わるごとに参加者に伝えられた。また, 各問題に回答後, その回答への自信度を, 1 (自信なし)～5 (自信あり)の 5 段階で答えてもらった。

**手続き** 参加者には, Yes/No によって得点が異なり, できるだけ多くの得点を稼ぐということを目的に行うことを理解してもらい, 初めに練習問題を行った。その後, 飲酒なし条件, 0.15mg/l 条件, 0.30mg/l 条件の順番で本試行を行った。必要な飲酒量は実験参加者の体重に基いて算出し, 各条件間で飲酒をした後, アルコール検知器(東海電子株式会社製 ALC-mini II)を用いて呼気中アルコール濃度の測定を行った。

## 結 果

自信度が 1～3 と低い問題での Yes の回答率をリスク行動傾向の指標とみなして比較した。また, 回答時間は問題によって制限時間が異なるため, 制限時間から回答にかかった時間を引いた余りの時間を比較した。スクリーニングテストによる分類の結果, 15 名中, 欠損型は 5 名, 非欠損型は 10 名であった。

**正答率** 欠損型の被験者群において, アルコール濃度上昇に伴い徐々に正答率が下がっていったが, 有意差は見られな

かった。

**リスク行動傾向** 始めの分析では有意差がみられなかった。次に, 飲酒なし条件における Yes 回答率が, 全参加者平均より 1σ 以上高かった 3 名を除く 12 名(欠損型 4 名, 非欠損型 8 名)で再度分析を行ったところ, 5%水準で条件による主効果が見られ, 0.30mg/l 条件の Yes 回答率が飲酒なし条件より有意に高かった ( $F(2, 20)=4.61, p<.05$ )。また, 欠損/非欠損群とアルコール濃度条件の間に有意な交互作用がみられた ( $F(2,6)=6.08, p<.05$ ) (図 1)。

**回答時間** 被験者内・被験者間ともにほとんど差がなく, 有意差はみられなかった。

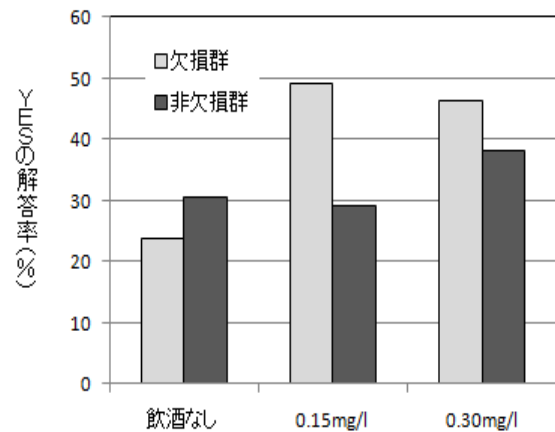


図 1 Yes の回答率の平均値

## 考 察

欠損群においてリスクの高い行動選択肢である Yes 回答がアルコール摂取により有意に増えたことから, 少なくともアルコールに弱い人においてはアルコール摂取がリスクテイキング行動に影響を与えることが分かった。これは, アルコールによりリスクをそれほど大きなものと感じなくなる, もしくはリスクによって得られる利益に目を向けやすくなるためと思われる。

## 文 献

藤田悟郎 2004 アルコール代謝の個人差と低濃度アルコールが運転に及ぼす影響, 自動車技術会論文集, Vol.35, No.4  
中村信次 2007 アルコール摂取が認知課題遂行に及ぼす影響—飲酒運転はドライバーの認知判断能力を如何に阻害するのか?—, 日本福祉大学情報社会科学論集, 第 10 巻

\*本論文で報告した実験データは, 立教大学現代心理学部の杉浦小菜実さんによる 2009 年度卒業研究で得られたものである。記して感謝の意を表したい。